

2018(平成30)年

2月24日

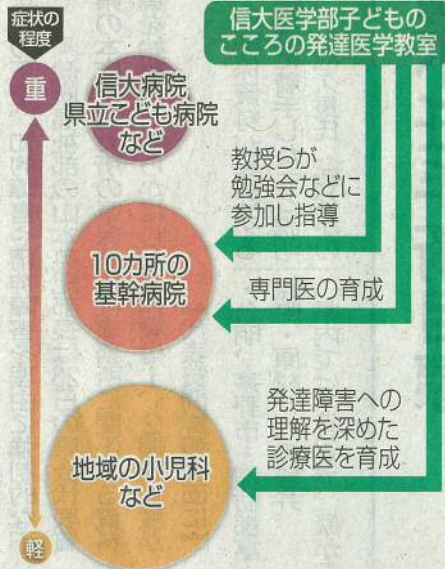
土曜日



池田 はかなき鉄道の記憶

池田町の旧家で見つかった昭和初期の時刻表。色あせた貴重な資料から、かつて北安曇を走った鉄道の姿がよみがえる。31面

発達障害児の診療態勢のイメージ



信大医学部

発達障害対応の医師育成

地域の小児科医ら対象

信州大医学部(松本市)が4月、発達障害の子どもを診察できる医師を育成するため、新組織を立ち上げることが23日分かった。子どもの1割前後に発達障害への対応が必要とされるが、県内でも診察できる医師は少ない。地域で小児科医として働く医師らに発達障害の知識を身に付けてもらい、診療態勢の底上げを図る。

新組織は「子どものこころの発達医学教室」。医学部内に設け、子どもの発達障害に詳しい教授1人、助教3人、臨床心理士1人らが教員となり、研修に当たる予定だ。

呼び掛け人で、ともに医学部の中沢洋三教授(47)と小児医学教室、鷲塚伸介教授(53)の「精神医学教室」によると、子どもの場合、まずかかりつけの小児科を受診することが

発達障害「落ち着きがない」「注意欠陥多動性障害(ADHD)」、他人とのコミュニケーションが苦手で自閉症といった広汎性発達障害、音読や計算をはじめ特定の学習が困難な「学習障害(LD)」などの総称。生まれつきの脳機能障害が原因とされ、親の育て方や家庭環境は関係しない。2016年に発達障害者支援法が改正され、教育や就労など切れ目のない支援実現が盛り込まれた。

多いが、発達障害についてはよく知る医師は少ない。また、より高度な診察ができ、学会認定を受けるなどした「専門医」は県内に5人ほど。初診の予約が半年待ちだったり、医師の地域的な偏りがあったりして希望者に十分対応できていないという。

医師不足の解消急

解説 発達障害の知識を十分に身に付けて子どもを診察できる医師が全国的に不足する中で、信大医学部による医師育成は先進的な取り組みとなる。早い段階で支援を始めて継続していくことが、その後の社会生活にも

重要とされており、育成の意味は大きい。

信州大病院(松本市)子どものこころ診療部の本田秀夫部長(54)によると、発達障害で支援が必要な子どもは1割前後、県内の15歳未満では推計3万人とされるが、わずか

な「専門医」集中する現状。本田部長は、学生時代について詳しく指摘。小児科医どもの発達障

こうした状況の改善に向けて、県内のどこに住んでいても同水準の診察が受けられる態勢づくりを構想。子どものこころの発達医学教室は研修カリキュラムを設け、発達障害の知識がある「診療医」、専門医をそれぞれ育成する。

地域の小児科医や精神科医を診療医に育てることを想定し、それぞれ勤務先の病院から通い、1年の研修を受ける。5年で25人ほどの受講を目指す。各病院で診察に生かしてもらう。専門医の研修は2、3年で、信大医学部所属とする。5年で5人ほど育成し、県内10圏域ごとに拠点となる基幹病院を今後決めて配置する。

これにより、度が軽ければ、重度であれば、(本市)や県立(豊野市)で診つた、医療機をを整える。

また地域間くすため、同基幹病院でも定期的に参加医療従事者らするそれぞれ処方方法をとる同教室の開業。県は20算案に運営費を盛った。